山田詠美の外国語・外来語表現

――『ベッドタイムアイズ』を中心として――

原田恵美子

一、はじめに

山田詠美以前の作家や同時代の作家の作品中にも外国語・外来語は見られるものの、初期の彼女の作品ほど外国語・外来語表現が作品の中に多用されているものはないのではないかと思われる。その中でも、とりわけ、それまでの他の作家の作品には見られない特殊とも言える外国語・外来語表現が、山田作品をより独特のものにしている。

しかし、山田の最近の作品、特に小説作品には、それまで見られた独特の外国語・外来語表現を殆ど見ることができない。

さて、山田詠美の小説作品の傾向については、川村湊氏が詠美との対談のなかで、詠美作品には二系列あり、一つは男と女の関係を描いたもの、もう一つは子ども期の鋭敏な感受性や独立を描いたものであると指摘している。(1)

また、子ども期を描いたものについては、桜本正樹氏が次のように述べている。(2)

『ジェシーの背骨』は、少年ジェシーの大人の世界への通過儀礼のプロセスの記述という極めて通俗的な物語パターンを基本構造としている（本作を作者の「少年論」とするならば、被虐的な環境での繊細な少女の心象風景を綴った『蝶々の纏足』(87)、『風葬の教室』(88)等の作品を、「少女論」と読むことができるだろう）

さらに、松田良一氏は、先に挙げた二つの意見をまとめた形になるが、「山田詠美作品を大ざっぱに分けると四つになる」と指摘する。(3) それは、「大人の男と女の恋愛を描いた小説群」、「少年もの」、「学校を舞台にした学園もの」、「そうした区分ではうまく分類できないその他」であるという。

これらの意見を総合すると、山田作品は「恋愛もの」「少年もの」「学園もの」「その他」の四つの作品群に大別できる。この中で

外国語・外来語の特徴が最も多くあらわれているのは、恋愛もの、次いで少年ものである。

この小論では「恋愛もの」に属する山田のデビュー作『ベッドタイムアイズ』を取り上げ、特殊な外国語・外来語表現に焦点を絞ってその特徴を指摘する。

二、比喩表現

山田作品には外来語を用いた比喩表現が多く見られる。自身も「私が書いていて楽しいと思えるのって譬喩なんですよね。普通にいわれている表現じゃなくて、自分の目で見たのをそのまま言葉に表すということにすごく快感を覚えるんですよね。」という。[4]

『ベッドタイムアイズ』にみられる比喩表現は、明喩と暗喩に分かれる。以下に、それぞれの語彙をX（素材）―Y（対象）のように分類し、特徴をみていく。なお、文の連続体の中に比喩表現が二つある場合は、そのまま列記・分類した。また、語彙別の分類に関しては、国立国語研究所資料集 六『分類語彙表』を参考に、独自に分類を行った。

◆明喩

〈人工物〉

・ダイスが転がってゲームが始まった気がする。

（二十六・一～二）

X　ダイスが転がってゲームが始まった　―　Y　なし

（キムがスプーンを愛し始めた事を暗示している）[5]

「オレはスロットマシーンでスリースターを出した気分だよ。（略）」

（中略）私たちの関係をスロットマシーンのゲームにたとえるなんて気がきいている。

（九十四・一～六）

X　スロットマシーンでスリースターを出した　―　Y　なし

X　スロットマシーンのゲーム　―　Y　私たちの関係

・私はテーブルの上の書類の束をスプーンめがけて投げつけた。散らばった紙は負けのカードのようにきちんと広がり私をかっとさせた。

（六十八・二～四）

X　負けのカード　―　Y　散らばった紙

・ベッドの横の鏡に目をやる。白いシーツを私はつかみ、幾重にも重なった皺の上に私の体はある。それは、ただのぼやけたフォトグラフに見える。

（四十五・十～十二）

X　フォトグラフ　―　Y　それ（＝鏡に映ったキムの姿）

・何の決まりなのか知らないが彼は私をベッドに引き摺り上げキャラメルのパッケージを開くように服を脱がせた。

（五十八・二～三）

X　キャラメルのパッケージ　―　Y　なし

・小さな赤ん坊にするように彼は私の頬をつねったり、唇を指の先でクリップのようにつまんだりして顔を滅茶苦茶にし

た。　（八十四・十一～十二）

X　クリップ　―　Y　なし

・けれども私は、嫌な予感に包まれて一緒に笑う事など出来なかった。私は瞬きもせずにスプーンの幸福な横顔をオブジェのように見詰めた。（百六・十～十二）

X　オブジェ　―　Y　スプーンの幸福な横顔

・私は初めてスプーンと出会った晩を思い出した。慌ただしく愛し合った感動は凝固したまま体に残り、その後のあのウィンクと同時にカプセルが溶けて行くように私の心に効き始めたのだった。（百二十・三～六）

X　カプセル　―　Y　なし

・彼の裸の体は最も居心地の良いシーツのように思われる。（三十八・四～五）

X　シーツ　―　Y　彼（スプーン）の裸の体

・いつも、あんたをシャワーのように浴びていたいのよ、スプーン。（百十六・三）

X　シャワー　―　Y　スプーン

・足首には小さなショーツがハンカチーフのように巻きついている。（十一・三～四）

X　ハンカチーフ　―　Y　ショーツ

〈食物など〉

・私は唇に力を込めてその胸毛を引っ張りながら男の体臭を味わう。（中略）ココア　バターのような甘く腐った香り。（十・四～六）

X　ココアバター　―　Y　（男＝スプーンの）甘く腐った香り

・濃いまつ毛に縁取られた大きな目は涙の膜で濡れていた。それを見た途端、私の胸に大きなパンの塊りを飲み込んだ時のようなつかえを感じた。（六十四・十～十二）

X　大きなパンの塊　―　Y　（私＝キムの胸の）つかえ

・「似合わねえ！一体、今日はハロウィンだっけ？まるで缶詰のトマトじゃねえか」（百五・一～二）

X　缶詰のトマト　―　Y　（キムの赤い口紅を塗った唇を指す）

・あんたのペニスを、あんたの持っているスプーンでバナナのようにくり貫いて食べてしまいたいと切望したのよ、スプーン。（八十七・八～十）

X　バナナ　―　Y　あんた（スプーン）のペニス

・「あんたを見る度にあたしの心はジェリイのように揺れる。それをあんたに悟られてしまうのがすごい恐い」（九十三・十一～十二）

X　ジェリイ　―　Y　あたし（キム）の心

・彼の四文字言葉（フォーレターズワーズ）は極めて音楽的に聞こえる。それの入っていない優雅生英語は今の私にとっては不能の男の飲む気の抜

けたビールのような代物だった。

（二十九・五～八）

X　（不能の男の飲む気の抜けた）ビール　―　Y　優等生英語

・　惨めな気持がアルカセルツァの泡のように胃の底から噴き上げてくる。

（八十四・一～二）

X　アルカセルツァの泡　―　Y　（キムの）惨めな気持

〈人物など〉

・　汗の川を造る背中の窪みに続いたスプーンの尻。私はいつも、そこに手を触れるのが怖かった。割れ目に誤って手を差し込もうものなら、くわえ込んだまま二度と放しはしないだろう弾力のある尻。私が手首を切り落とさない限りは。まるでアンデルセンの童話。足を切り落とすまで踊り続けなくてはならなかった赤い靴を履いた少女。私は踊り続けなくてはならない。

（四十三・六～十二）

X　アンデルセンの童話　―　Y　なし

・　その髪はメドゥーサのように今にも一本一本が蛇になって蠢きそうにユラユラと揺れていた。

X　メドゥーサ　―　Y　その（マリアの）髪（6）

（七十一・七～九）

・　私はジャンヌ・モローのようにふてぶてしい笑いを浮かべようとしたが小娘すぎて不可能だった。（八十五・三～四）

X　ジャンヌ・モロー　―　Y　（私＝キムの）ふてぶてしい笑い

・　そして、いよいよ、あの悪魔の電話がかかって来た。警察からではなかった。どこかの大使館（中略）の人間がジョセフ・ジョンソンはいるかと、聞いた時、私はスプーンが、そんなキリスト教徒のような名前を持っていた事を知り驚嘆した。私は彼の本名すら知らなかったのだ。（百六・一～七）

X　キリスト教徒　―　Y　スプーンの名前（本名）

〈楽器など〉

・　スプーン、私の唇をコルネットを吹くように吹かないで、プリーズ。

（六十二・四～五）

X　コルネットを吹く　―　Y　なし

・　彼の指は自動ピアノのように私の首筋をたたいた。

（百十五・十～十一）

X　自動ピアノ　―　Y　彼（スプーン）の指

〈音〉

・　ノイズの塊りのようなこの男は、最近、哲人のように沈黙している。

（六十七・二～三）

X　ノイズの塊り　―　Y　この男（スプーン）

◆暗喩

〈人工物〉

・　彼は私の皮膚が剥がれてしまうくらいに強く、私の首筋を

吸った。そこには、かわいそうな紫色の蜘蛛の巣が散乱する。その蜘蛛は彼の心を捕食しようと待ち受ける。けれど、いつのまにか私は、そんな大それた考えを捨て、スプーンの小さなおもちゃになる事を楽しみ始める。トイは気まぐれなキッズにたたきつけられ、もてあそばれるうちに、その痛みを楽しみ始める。（四十・六～十一）

X　トイ　―　Y　私（キム）

X　キッズ　―　Y　スプーン

私は時々不安になった、スプーンにのめり込んで行く自分が。私はスプーンというジグソーパズルの一片になるのがこわかった。（五十六・八～九）

X　ジグソーパズルの一片　―　Y　スプーン

ダイスが転がってゲームが始まったような気がする。だけど、こんなに深刻なゲームが今までにあったかしら。（二十六・二～三）

X　深刻なゲーム　―　Y　なし（キムがスプーンを愛し始めた事を指す）

私はテーブルの上の書類の束をスプーンめがけて投げつけた。散らばった紙は負けのカードのようにきちんと広がり私をかっとさせた。それらが何かの設計図に違いないと私が悟ると同時にスプーンは私の頬をしたたか殴りつけた。弾みで床に転がった私に一瞥をくれ、彼は私の負けのカード（確かにそのポーカーゲームは彼の勝ちだった）を拾い集めると何も言わず出て言った。（六十八・二～八）

X　負けのカード　―　Y　私（キム）がスプーンに投げつけた書類の束

X　ポーカーゲーム　―　Y　なし

スプーンの肌が熱いタールになって私の体を包み込む。（九十・十一～十二）

X　熱いタール　―　Y　スプーンの肌

私は心地良さに猫のように目を細めて、あんたはわたしの気持のよいシーツだと告白した。（三十九・五～六）

X　シーツ　―　Y　あんた（スプーン）

白いシーツを私はつかみ、幾重にも重なった皺の上に私の体はある。（中略）その上に私のもう一枚のいとしい黒いシーツが載せられ、タイトな写真が現像される。（四十五・十～四十六・一）

X　（いとしい黒い）シーツ　―　Y　なし（スプーンを指す）

マリア姉さん、私のテキストブック。（六十三・六）

X　テキストブック　―　Y　マリア姉さん

〈食物など〉

（飼い猫をかばってスプーンに赤いペンキのスプレー缶をかけられ、髪の毛が唐辛子のように真っ赤に染まってかちかち

に逆立ってしまったキムと、スプーンが）

台所の床で愛し合った後、スプーンは私を「オレの愛するチリソース」と呼んだ。

スパイスのきき始めたチリソースは仕事場に電話し、今日、父親が死んだのでステージには上がれないと言った。

（三十五・十～十二）

X　チリソース　―　Y　私（キム）

X　スパイスのきき始めたチリソース　―　Y　私（キム）

・スプーンの黒光りする体は噛めば甘い汁がじわりと湧いて来そうなチョコレートだった。（七十一・十二～七十二・二）

X　チョコレート　―　Y　スプーンの黒光りする体

・スプーンのヘアは肌の色と保護色になっているからか、ディック自身が存在感を持って私の目に映る。私は好物のスウィートなチョコレートバーと錯覚し、口の中が濡れて来るのを抑える事が出来ない。（十一・十一～十二・二）

X　チョコレートバー　―　Y　（スプーンのディックを指す）(?)

・私の体は果汁を搾り出す。シュガーをたくさん溶かし込んで、スプーン。

（九十・四～五）

X　シュガー　―　Y　なし

・「ねえ、スプーン。あたし、今、トーストの上のバターよ」

（八十八・七）

X　トーストの上のバター　―　Y　あたし（キム）

・ラジオからティナ・ターナーが流れて来る。あの大きな口は魅力的だったと思いつき、私は化粧台の前に立ち、赤い口紅を取り出した。（中略）出来上がりはチェリーというより、真赤に熟したネクタリンの感じだったが、私は満足して煙草をくわえた。

（百三・十～百四・四）

X　チェリー　―　Y　なし（赤い口紅を塗ったキムの唇を指す）

X　ネクタリン　―　Y　なし（右記に同じ）

・次第に記憶は沈殿して私の中で上澄みになる。まるで何事も起こらなかったただの水に見える。人々は知らない。私は誰にも気付かれないように時折、そっと、下にたまったクリームを指ですくって舐める。その時、初めて私は優越感を感じ、声を出す。「美味しい」と。（百二十六・十一～百二十七・三）

X　クリーム　―　Y　なし（キムのスプーンに関する記憶を指す）

〈人物など〉

・「お前は、オレにとってライナスの毛布だって事、解ったぜ」

（八十六・五）

X　ライナスの毛布　―　Y　おまえ（キム）

〈動物など〉

・わたしの臭覚はポリスの犬になる。

（九十一・一）

X　ポリスの犬　―　Y　わたし（キム）の臭覚

まず、明喩では①一つの文中にXとYがあり、「～のような…」「～に見える」「まるで～」という形式 ②一つの文中にXとYがあり、「～（のよう）に…（する・だ）」という形式 ③一つの文中にXしかないが、話の流れでYの内容が判別出来、「～（した）気がする・気分（だ）」という形式 の3つの分類に当てはまる。

明喩・暗喩とも語彙の特徴では〈人工物〉に属するものが最も多いが、中でもキムとスプーンの関係を表すのにゲームやそれに関する語が用いられている。また、「シーツ」「ライナスの毛布」といった寝具が相手を指し、男女の関係の親密さをあらわしている。

次に目立つのは、〈食物など〉に属する語がキムやスプーンを表している例である。とりわけ「ココアバター」「バナナ」「チリソース」「チョコレート」「チョコレートバー」「シュガー」はそれぞれが相手に対する欲望に直結した表現である。また、「トーストの上のバター」「ジェリィ」「クリーム」といった語が、キムの感覚や感情の繊細な部分を表している。

三、ルビの表現

井上 健氏によると、山田詠美が新しい文学の担い手の一人たりえる理由の一端は、その文体、小説言語であるという。氏は「『日本語として表記される英語』とでも形容すべき、原文なき翻訳文―島田雅彦風に言えば「人工的亡命文学」の言語―の持つ新鮮な効果に依拠しつつ、言葉にすることと気持を通じさせることとが同義であるようなアメリカ社会の特性を徹底的に利用していく」と述べる。(7)

「原文なき翻訳文体」とは、英文を日本語訳したときのような表現を指すが、そのためには、ルビによる表現や、英語表現・外来語表現による支えが不可欠であるといえよう。

まず、詠美の小説作品に見られるルビの表現の特徴は、次の三つに大別できる。

一、日本語に英語のルビを振ったもの

【名詞】

〈部屋など〉

・彼はやがて連れ戻され、基地の留置所（ジェイル）に入り、本国に強制送還されるだろう。（二十三・三～五）

・中を覗こうとする私を台所（キッチン）に追いやり、彼はあちこちに電話をかけ始めた。（二十九・一～二）

・倉庫（ロフト）のような広い部屋の隅のベッドの上に上体を起こして、スプーンはいた。（七十一・五～六）

・もしも、彼らが捕まった時、膨大な罰金を科せられ、（中略）大抵は軍の刑務所（ジェイル）に行き、軽い罪の場合でも身分証明のID

を取り上げられ、基地の外には出られなくなる。(百・三〜六)

〈人物など〉

・「問題の多い男を拾って来たらしいわね。GIで、しかも軍を脱走中。ヒモ(ヒンプ)になる条件がそろってるじゃないの」

(二十七・十一〜十二)

・「さっきはハロウィンなんて言ってたくせに。こんなの娼婦(ヴァンプ)みたいだよ」

「オレのレディはいつだってオレのフッカーだよ」

(百十六・十〜十二)

・ストリートをいかにクールにやくざ者(ギャング)のように歩くか。(ハンギング・アラウンド)

(三十二・一)

〈人工物〉

・寝椅子に横になった大きな図体は私の心を悩ませる。

(六十七・四〜五)

・寝椅子(カウチ)に座り込んで私はぶつぶつと呟いていた。

(百三・八〜九)

・(略)いつのまにか私は、そんな大それた考えを捨て、スプーンの小さなおもちゃ(トイ)になる事を楽しみ始める。

(四十・八〜十)

・弾き出された二十五セント(クォーター)はすくおうとしても、すぐに手から溢れ出る。

(九十四・三〜四)

〈本・雑誌など〉

・翌日のFENのニュースで彼が軍の機密書類を売ろうとして捕まった事を知った。

きっと軍の星条旗新聞(スターズアンドストライプス)には大きく載せられているに違いない。

(百二十三・七〜九)

〈衣服など〉

・体にハイヒールと中折れ帽(ハット)だけを身に着け再びマリア姉さんは登場する。

(十八・十一)

〈色〉

・「あんたの肌って本当に黒檀(エボニー)ね」

(四十二・十一)

〈挨拶など〉

・「乾杯(ナプチュス)」

(八十五・十二)

〈食物など〉

・トマトや赤唐辛子(レッドペッパー)に漬け込んだスパイシーな肉を小さなオーブンに並べて焼く。

(百十・一〜二)

〈行動・行為〉

・それより、私は自分の歌っているクラブで、たまにホステスに売春(プロスティテューション)をさせていたので、そちらの方を探っているのではないかと心配した。

(百二・十二〜百三・二)

【形容詞】(ナ形容詞を含む)

・基地のクラブでスプーンを初めて見た時、彼は何故かブラックタイにタキシードで正装していて、ネイビーの作業着やジーンズ姿で玉突きをしている男たちの中では滑稽なくら

いに粋（クール）だった。
（七・三〜五）

・ 恍惚とした表情を浮かべながらも粋（クール）に乾いている。
（十八・十二〜十九・一）

・「あんたって最低の男だよ！アル中でジャンキーで。あたしだってみっともなし（アグリー）の日本人なんだ。（略）」
（五十・十二〜五十一・二）

・ 彼は徐にスプーンの写真を見せた。その写真は写りが悪くてスプーンはみっともなし（アグリー）に見えたので、私は返事をしなかった。
（百七・十一〜十二）

【副詞】

・ スプーンは一日のうちで、どの時間にメイクラブをするのが好きか、と聞いた。私は彼に媚びようとして「いつでもよ（エニタイム）」と答えた。
（四十・二〜三）

・「どんな気分？」と尋ねたら「まあまあ（ソウソウ）」とでも答えそうな雰囲気だ。
（七十七・七〜八）

【動詞】

・ ストリートをいかにクールにやくざ者（ギャング）のように歩（ハンギングアラウンド）くか。
（三十二・一）

【句・節】

〈言語など〉

・ 彼の四文字言葉（フォーレターズワーズ）は極めて音楽的に聞こえる。
（二十九・五〜六）

・ どんなに汚ない言葉（カスワード）をぶつけてもあの育ちの悪い大馬鹿にはこたえないだろう。それが彼の日常語なのだから。
（八十四・三〜四）

・ 私は思い出をいとおしんでいる！思い出という言葉を！私にはまったく関係のなかった意味（ダムワード）のない言葉。
（百二十六・五〜七）

〈人物など〉

・ ねえ、あんたの女（ユアガール）はあんたに夢中なんだけど、というようないつもの軽い告白も出来ずに私は横の黒い顔を盗み見する。
（六十六・十一〜十二）

・ 私の部屋には、時々、その手の電話があり私を苛々させるのだった。一度など、スプーンの悪友達（バッドカンパニー）からのからかい電話で「こちらネイビーポリース…」と受話器から流れて来た時、私は震え上がり、そして、それがジョークだと知り、かんかんになって悪気のないウィリーという男を怒鳴り散らしたのだった。
（百二・一〜五）

〈禁止〉

・ ドアには立入禁止（キープアウト）の札が下げられ中はむき出しのパイプが複雑に絡み合ったボイラー室になっていて古い埃の匂いが漂っている。
（九・一〜二）

〈食器など〉

銀の匙をポケットに入れて持ち歩くという滑稽な事をしている彼を人々がスプーンというニックネームで呼ぶのは、親しみに加えて、嘲りの気持をこめて、に違いない。銀の匙(シルバースプーン)をくわえて生まれて来た者がそれを持ち歩く訳がないからだ。

（十三・八～十一）

【文章】

「静かに、ベイビー。雨の音(リスントゥザレイン)を聴きなよ」

（四十六・五）

「どんな気分(ハウユーフィール)?」と尋ねたら「まあまあ(ソクソウ)」とでも答えそうな雰囲気だ。

（七十七・七～八）

「愛してる?」

スプーンの返事はない。いつも、当たり前だ(オブコースイエス)よであっけなく受け流される、私たちの間で一番軽くて意味を持たない言葉。それが口に安易に出せない濃度の濃いものに変化して行くのが解る。

（八十五・五～八）

なんてちっぽけ(プアリトルミー)な私。

（九十六・十～十一）

二、英単語に日本語のルビを振ったもの

彼が私を bitch(あばずれ) と呼ぶ時、私は親愛なる同志を見るように感じる。

（二十九・八～九）

三、外来語に漢字のルビを振ったもの

インディアン・サマー(小春日和)。日ざしは強い。（六十一・十二）

全体的には外来語のみの語彙数が圧倒的に多いが、このようなルビの表現は随所に見られ、日本語だけでは伝わらない雰囲気を補うという役割を果たしている。中には、「ヒモ(ヒンプ)」「娼婦(ワカー)」「汚(カス)な言葉(ワード)」「意味のない言葉(ダムワード)」といった米俗語に由来するものもある。

二は原語表記にその意味のルビをあてたものである。三のようにカナに意味を指す漢字のルビをあてたものも見られる。これらの表現は、『ベッドタイムアイズ』にしか見当たらず、その後の山田作品でも見ることが出来ない。

『ベッドタイムアイズ』における会話や会話に準ずる表現では、このようなルビの表現によって登場人物が英語を話していると判別でき、基地およびその周辺の異文化的な雰囲気を絶えず醸し出したいという意図に基づく作者の工夫がうかがえる。

四、原語表現

原語表現は、三で述べたルビの表現以上に、英語としてのニュアンスをより直接的に伝えることが出来る。作中にはどのような原語表現があるのか、見ていきたい。

【単語】

「OH!SHIT!そのガッデムマザーファッキンソーダをくれよ」

（二十九・三～四）

「（略）寝ちまったのかよお。SHIT!（略）」

（五十四・十二）

・「FUCK」　（百十四・五）
・「OK、わかったよ」　（三十二・七）
・「NO、知らないわ」　（四十四・十）

【句・文章】

・私は、ふとスプーンがバスルームにスプレーした落書きを思い出す。
PUSSY IS GOD!!!　（十八・八～十）
・I'm gonna be your teacher.（オレは、お前に教えてやるよ。）　（三十一・九～十）
・スプーンの心の中にはタイプで打たれたこの言葉が行ったり来たりしているだけなのだ。
I AM SAD.　（五十九・一～四）
・私は二人を残したまま部屋を出た。私は人それぞれのCrazy about you の意味を考えた。
（八十一・十二～八十二・一）
・彼はたぶん知っている。たとえば地球最後の日を宣告されたとしても、私たちはみみずのようにベッドの中に潜り込み、ぬけぬけと大胆にこう言う事を。I don't care. Who cares?　（九十二・十一～九十三・一）
・「DON, T」
「DON, T、何？」
私の心には、もう公式が出来ている。
2 sweet + 2 be = 4 gotten
（Too sweet to be forgotten.）
「スプーン、忘れ去られるには甘過ぎるのよ」
「計算は苦手なんだぜ」
そんな事は知っていた。けれどスプーンは私という、ちっぽけな黒板に数式を書いた。それは悪戯好きの子供の落書きだったというのだろうか。　（百十八・四～百十九・一）

原語表現をみると、まず第一に、「SHIT」「FUCK」といった俗語の感嘆詞が目立つ。これは、「四文字言葉」のニュアンスを直接表したものと考えられる。第二に原語の文章が一文まるごと、そのまま日本語の文章の中で使われている点が、詠美独特と言える。また、補足ではあるが、俗語の外来語も見られる。「ビッチ」「ガッデム」「フッカー」「ガッデムマザーファッキンソーダ」「ファック、ユー！」「マザーファッカー」「ファッキンビッチ」といったこれらの外来語は、その前に原語表現やルビの表現があったり、原語表記で表すとくどくなったりしてしまうために、カナ表記であると思われる。

五・結論

本稿では山田詠美『ベッドタイムアイズ』を中心に、外国語・外来語表現の特徴として比喩表現、ルビの表現、原語表現と述べてきた。これらの特徴は他の山田作品にも見られる。まず、比喩

表現は最近では『A2Z』など、ルビの表現は『ジェシーの背骨』など、原語表現はエッセイ集『熱血ポンちゃん』シリーズによく使用されている。

しかし、『ベッドタイムアイズ』などに代表される特徴的な外国語・外来語表現が、最新作の一つ『姫君』では見られなくなっている。最近の小説作品の傾向としては、外国人を登場人物として扱うことがほとんどなくなってきているため、原語表現やルビの表現などがだんだんと用いられなくなってきている。

さらに、小説作品ではないが、パリの男娼たちを撮影した小林丸人氏の写真とのコラボレーション作品である最新作『巴里製皮腐菜子』では、「あばずれ」というルビの表現が帯をあわせて二例見られた。しかし、各編の主人公がパリの男娼であるのに、それまでの山田作品に比べて外来語自体がずっと少なくなっている。

今後の山田氏の小説作品に独特の外国語・外来語表現が復活するのか、それとも、消えていってしまうのか、その動向を追い続けていきたい。

なお、今回は扱わなかった一般的なカナ書きの外来語については、別の機会で論じたい。

注

(1) 川村湊・山田詠美「物語を織りなす心の動き」（『新刊展望』平一・十二）

(2)「現代小説一〇一篇の読み方」より「山田詠美『ジェシーの背骨』」（『國文学解釈と素材の研究』題三十七巻十一号）

(3) 松田良一「山田詠美愛の世界一マンガ・恋愛・吉本ばなな」

(4) 小島信夫・山田詠美「『性』を視座として」（『内面のノンフィクション』）

(5) スプーンとは、主人公キムの恋人のニックネームである。彼がいつもポケットの中にスプーンを入れて持ち歩くことに由来する。ちなみに、英語の言い回しの中に、幸運に恵まれた子供を「銀の匙をくわえて生まれて来た」という言い方があり、「銀の匙（シルバースプーン）をくわえて生まれて来た者がそれを持ち歩く訳がない」（十三・十～十一）いう、スプーンの境遇を暗示する描写がみられる。

(6) マリアはキムの憧れの女性である。作中では、実はマリアはキムを愛していたという設定である。

(7) ディックとは、黒人男性の性器の隠語である。

(8) 井上 健「人工的亡命文学の生成――島田雅彦と山田詠美における〈他者〉」

※なお、本稿の例文はすべて、河出書房新社『ベッドタイムアイズ』（昭和六十年十一月三十日 初版発行昭和六十年十二月二十四日 五版発行）からの引用である。

（はらだ えみこ 岡山大学文学部平成十三年度卒業生）